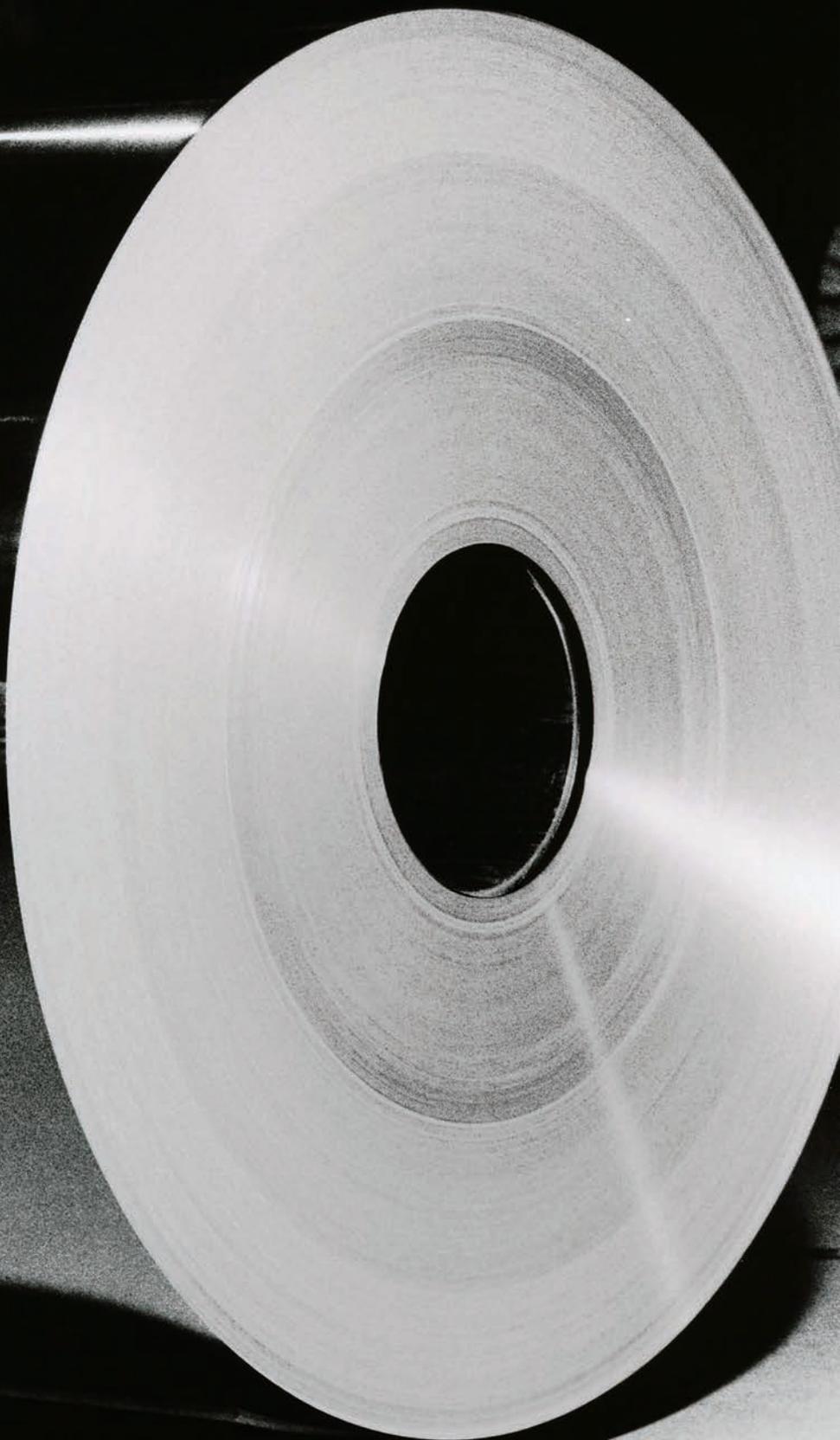


製鉄所の風景

ブリキはおいし





フリキといえば？ 年配の方々には、まずは懐かしいフリキのおもちゃだろうか。一方、若い世代だとなかなかすぐには出てこないかもしれない。ま、コーヒーでも飲んでゆっくり考えて……それ、そのコーヒー缶にフリキが使われているのである。

言葉は知っているものの、フリキが実際どんな使われ方をしているか、すぐに答えられる人は少数派だろう。でも、休憩で飲む缶コーヒーも、デザートのパイン缶も、近ごろブームのサバ缶も、実はその多くにフリキが使われている。

そもそもフリキとは、薄い鋼板に錫<sup>すず</sup>をめつきしたものを指す。それが缶に多く使われるのは、薄くて強いという鉄の特長があるからだ。ただし、鉄はさびる。そのさびを止めるためにめつきが施されているわけだが、その役割はさび防止だけでなく、入社以来フリキ一筋

の野田正和さん(薄板事業部フリキ営業部)が教えてくれた。「例えばパインアップル缶の場合、その鮮度とおいしさを保つためには錫めつきが欠かせません。錫がパインアップルが酸化するのを防いでくれているのです。産地や肥料の量によって成分が異なるので、それぞれに最適した最適なめつき量を提案しています。また、レトルト殺菌するミルクコーヒーやココアなどの缶飲料では、缶底を叩いてその音の振動数を解析し、製品の内圧を判別する打検によって、密封不良や殺菌不足を確認することも大きな特長です」

薄くて丈夫な鉄が缶素材にぴったりだというのはわかりやすいが、食べ物や飲み物のおいしさや安全性を守っていたとは驚きだ。

「自動車や機械は約10年、建物や橋は約25〜30年が寿命だといわれていますが、缶は非常に短い」(野田さん)。たしかに、ひとたび開けてしまえば、あとは廃棄される運命だ。けれど、日本ではスチール缶のリサイクル率が90%を超えている。家庭で分別排出すれば、自治体で分別収集し、国内の製鉄所でリサイクルされる循環システムができ上がっているからだ。「鉄は何度でも何にでもよみがえる」と言われるゆえんがここにある。

日本で初めてフリキが製造されたのが1923(大正12)年のこと。以来、薄さ、軽さ、そして強度を求める技術革新は続いた。現在、日本製鉄のスチール缶は業界最軽量となる16・2g(蓋を除く)を実現している。缶の重さは一般的な2ピース缶に比べて約40%も軽くなり、商品を運ぶときのCO<sub>2</sub>排出量も大幅に減った。

スチール缶は極めて環境にやさしく、リサイクル性に優れた製品なのだ。

手軽に、安心して缶詰を食べたり、缶飲料を飲んだりできるのは、フリキのおかげなのである。ということ、今日もおいしくいただきます！

(ライター 小平吾朗)